

熟柿庵だより



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵
平成二十九年五月第百十三号

彦根 西福寺にて

「住職、毎日生きていても楽しいことなんか何にもないですわ。生きている意味がわからん、どうしたらいいの？」

昼過ぎの境内で、ふらつと立ち寄りられた七十歳過ぎの檀家さんからの言葉。あまりにストレートで素朴な問いかけに返事もできず、それからしばらく境内の石段に腰かけて、ずつとお話を聞くことになりました。話の内容は他愛のないことばかりでした。夕暮れ近くなって少し肌寒くなって、取りあえず思い浮かぶ話題も無くなったのでしょうか、不意に立ち上がってふわふわと帰っていかれました。話している間、目の前のブランコで小学生の女の子たちがキャッキヤと無邪気に遊んでいる光景がとても印象的でした。人生の後半を生きている初老の男二人が話している内容とあまりに対照的だったせいかもしれません。

「楽しいことなんか何もない」

彼は二年前に母親を見送り、今は一人暮らしです。精いっぱい母の面倒を看てきて、やる事が無くなってしまつて、当面の生きる目標を見失っているようです。

生きる目標、生きがい、やるべきこと、私たちは人生の大半をそのことのために生きてきました。そのことをやり終えて、それで人生を終えられればいいのだけれど、そうはいきません。

今まで自分の体力と能力を、世間で精いっぱい働かせていきました。そのあいだ「なぜ私は生きているの？」なんていう問いすら思い浮かぶ時間もなくなりました。そうした生き方から次第に退いて、けどまだ残っている人生を生きなければならぬ。「終活」などという薄っぺらな言葉では済まされぬ日々が残されています。

「これからは、あなたの本当の人生が始まるのです。今までは家族のためとか社会のためとか、人のために生きてきたのです。これからは自分のためにだけ生きてください。眼を外に向けてのではなく、内に向けて生きていってください。古代のインドでは人生の晩年を『遊行期』と云って大切な時期と位置付けているのですよ。」

私が僧侶の立場でいたら、そんなふうに話したかもしれません。

だけどもだん着になって、年老いて何気ない日常を生きる人間の立場に戻った時、たぶん「そうだよね、楽しいことなんかにもないよね、これから淡々と生きるしかないよね」と返事してしまえばいいです。

カナダのバンクーバーと西福寺

先日、日系三世のアメリカ人女性二人と京都にお住いのご兄弟の方がお寺にお越しになりました。カナダのバンクーバーで亡くなった祖父のお話を聞きたいとのことでした。話は一ヶ月ほど前にさかのぼります。京都の見知らぬ女性から電話がありました。「祖父がカナダで亡くなった折り、お骨を日本に持ち帰ってお寺さんにご供養してもらったのです。彦根のお寺さんで浄土真宗なのですが、どのお寺さんかはつきりわからない。昭和二十年代ごろに亡くなっているのですが、調べて頂けませんか」とのこと。雲をつかむような話でしたが、取りあえず了解しました。それから数日、過去帳と格闘しておりましたら、なんと昭和二十八年に亡くなられた祖父のお名前を発見。さっそく京都のお孫さんにご連絡をしましたら、アメリカに住んでいる日系三世のお孫さんにも連絡して、来日してもらって一緒にお寺に伺いたいとのことでした。こうしてその日が実現しました。

西福寺の本堂で、過去帳を前にしていろいろお話を伺いました。祖父のお名前の添え書きに「庄兵衛の分家」とあり、推察するに祖父にはおそらくご兄弟がいて、その子孫の方がひょっとして今もこの地に住んでおられるのではないかということになったのですが、それ以上のことはわからず、最後は皆さんと本堂でお勤めして故人を偲びました。日系三世の二人の女性は、数日後にはアメリカに帰国されるとのことで、片言の日本語で「祖父がお世話になったお寺さんにやっと出会えた」と、目を少し潤ませておられました。

後日、その祖父のお兄さんに当たる方のお孫さんがこの地に住んでおられることがわかり、いろいろお話を伺うことができました。

西福寺の過去帳には「トロントにて逝去」とかバンクーバーといった地名が随所に見えます。

カナダのバンクーバーと彦根とは深いご縁があります。先日、その歴史を調べておられる松宮さんという方にお会いして詳しくお話をお聞きしてきました。

琵琶湖に面した彦根は一見穏やかな地形に見えますが、鈴鹿山系から流れてくるたぐさんの河川に挟まれて、過去何度か洪水に見舞われております。特に明治二十九年の洪水の被害は大きかったようで、多くの方が家を流されるなどの被害を受けました。それを機に彦根の、特に湖岸沿いの西福寺のある大藪町や開出今、甘呂、八坂に住んでおられた方たちが海外へ働きに行かれたとのことでした。

特にカナダのバンクーバーに彦根の方が集中し、日本人街と云われるほどの地区が形成されています。その中のパウエルと呼ばれる地区は、現在も当時の詳しい市街地図が残っていて、通り沿いのお店は大半が滋賀県人で、多くの彦根の方のお名前が一軒ずつ書かれております。また、当地において明治四十八年から昭和十六年まで発行されていた「大陸日報」という日刊新聞があつて、現在もすべての号がマイクロ化されて市の図

書館に残されているとのこと。日系カナダ移民の重要な歴史的資料です。

さて私も数年前まで、実際にバンクーバーへ行っておられたお檀家さんたちに直接にお会いしております。その時の苦労話をお伺いしている際に突然「朝食はいつもブレックダンバター（パンとバター）でした」と英語が飛び出してきて驚いた覚えがあります。だけでももうすでに多くの方が亡くなっておられます。

数年前に亡くなられた方がおられて、お名前が妙に気になっていて、ご葬儀の時にそのお名前の由来をお伺いしました。ご親戚の方のお話によると、彼の母親が妊娠して、カナダからの帰国途中に船上で彼を出産したとのことでした。その船の名前を彼につけたとのことでした。

今でもとても印象に残っているのは、年配の女性が話してくださったことです。

「私の母はカナダで妊娠したのですが、日本で出産したいと思い、父をカナダに残し、単身日本に帰ってきて私を産んでくれました。その時の写真をカナダに送ったのですが、数か月後カナダから手紙があり、父が事故で亡くなったという知らせでした。父は赤ん坊だった私の写真を見てから死んだのかしら、それとも見ることもなく死んだのかしら」というお話でした。独り言のように遠くを見るように話してくださいました。九十歳を過ぎた彼女の人生の始まりの物語です。

私一人で聞くのがもったいないような物語でした。

【余談】

「ビックコミック」という漫画雑誌に「バンクーバー朝日軍」というタイトルの物語が連載されていたようですが、その野球チームはかつて実在しており、明治期にそのチームを創設された方が松宮さんという方で、今回バンクーバーのお話を伺ったのは、その松宮さんのお孫さんでした。このチームについての物語は近年日本で「バンクーバー朝日」の題名で映画にもなったそうです。

「七高僧」と「聖徳太子像」の掛け軸

西福寺で一つの発見がありました。

本堂の内陣の左余間に掛けてある「七高僧」の掛け軸を、お檀家の仏具屋さんに修理していただきました。そんなに古いものとは思っていませんでしたが、数か月後、仏具屋さんから思いがけないご連絡がありました。掛け軸の裏書によりますと、これは今から三百年ほど昔、江戸時代中期のもので、当時の西福寺住職、釈浄裕が直々に京都の本願寺に依頼して作成していただいたものとのこと。文末には本願寺の第十三世ご門主の釈法如の直筆の署名と花押が記されておりました。修復にあたった職人さんも「こんな貴重なものを修復させていただいてありがたいことです」と云っておられたとのこと。

実は「七高僧」の掛け軸の隣に、同じ形式の「聖徳太子像」の掛け軸が飾ってありまして、ひよっとしたらと思えば裏面を見ましたら、やはり「七高僧」の掛け軸と同様の裏書がありました。こちらの掛け軸は近年に修復されたように思われます。おそらくその修復の時には裏書が判読できないほどに汚れていて、江戸時代のものだと気付くことができなかつたのかもしれないですね。

この度「七高僧」の掛け軸を丁寧に修復して頂いたお陰で裏書も判読でき、「聖徳太子像」の掛け軸と同時期の一对のものと判明し、貴重な二幅の発見となりました。今後とも大切にお守りしてまいります。

ところで、西福寺本堂は今から七十年ほど前に火災で全焼しております。ということからは火災の折にこうした宝物が運び出され焼失を免れたということなのです。燃えさかる中、宝物を運び出してくださった方々へ思いを馳せます。

「七高僧」「聖徳太子像」のこと

親鸞聖人がもつとも影響を受けた七人の僧侶。インドの竜樹菩薩、天親菩薩、中国の曇鸞大師、道綽大師、善導大師、日本の源信和上と法然上人です。「正信偈」という経典ではこの七人の高僧のお徳がそれぞれに述べられています。聖徳太子についても、日本に初めて仏教の真髓を伝えられた方として尊崇しておられます。

おしらせ

盆会法要のご案内

七月九日（日曜日）午前十時から熟柿庵において盆会法要を行います。

今回はお勤めの後、女優の山口晶代さんに「語り」を演じて頂く予定です。

演目は小泉八雲作「生霊いきりょう」と夏目漱石作「硝子戸うつちの中」の二作です。お楽しみください。その後、粗飯もご用意しております。